



IN THE BOX

mafuya79

——東京渋谷

ビルの壁面の巨大スクリーンに映し出された人物を見て、行き交う人々はわずかに時間を奪われる。彼らはそれを見て、美しいだとかカッコイイだとかそんな単純な言葉を頭に思い浮かべた。複雑な思考は停止し、単純な言葉しか出てこない。雑踏の中でそれは静かに人々の脳みそに染み込み、回路を形成し、CDショップへと足を運ばせるのだった。

スクリーンには『LEO』と、装飾された文字が浮かび上がる。

日本中いたるところでLEOの存在を垣間見るだろう。否、世界中でLEOの音楽は聞かれている。『LEO』は宗教じみた愛され方でもって世界から歓迎されたアーティストである。

出身日本と言う事以外、詳細不明のそのアーティストは熱狂的なファンによって神のように崇められる事もある。LEOのファッションは最先端であるし、彼は流行の創造主であった。ゴスメタルを基調とした彼の作る音楽を世界中のファンが待ちわび、CDセールスは記録を塗り替え続けているのだった。

気だるいベースと高圧的にも聞こえるメロディラインに乗る排他的な言葉を綴るハイトーンボイスとデスヴォイスは日本人にはなじみが薄いかも知れない。だが彼はフィンランドと言った欧州を中心に人気を獲得し、世界的な流行の波に乗る事が出来たのだった。日本では北歐メタルのファンから次第にファン層を拡大させてゆき、最終的には誰もが知るアーティストとなった。もともと日本ではヴィジュアルロックの流行もあり、流行の下地があったのかも知れない。

また、LEOの無機質な肌と深い瞳は作りものの美しさを持ち、人形のように飾られた衣装をまといステージで歌い叫ぶ姿は幻想的にも見える。そんな大がかりな人形劇を人々はインターネットを介してやり取りし、伝染病のように彼の姿が広まっていく。

スクリーンではそんな彼の日本公演の決定が知らされていた。そのニュースはSNSやファンサイトといたるところでささやかれ、日本を駆け廻ったのだった。

—某県〇市

田んぼに挟まれた道路を一台の真っ赤な郵便バイクが走り抜ける。田んぼはまだ稲が植わっておらず、少々寂しい風景であった。地元生まれの局員は、秋ごろの黄金に染まった同じ場所を思い出して微笑みを浮かべる。この土地は米がおいしいと有名な地域で、同じ品種であっても他の地方に比べて格段に高値で取引される事が殆どだ。

そしてその郵便局員は一軒の米農家の自宅前でバイクを停車させた。

「魚沼さあん、いらっしゃいますかあ」

中年の局員は呼び鈴も鳴らさずに戸を開く。引き戸の向こう側は土間があり、更に奥にある引き戸の向こうには事務所のようなところがあった。変な間取りになっているのは恐らく、古くからある家をそのまま増改築したせいだろう。

「魚沼さあん」

局員は更に奥の引き戸を開ける。するとキィキィと床を擦る音が聞こえた。

「御苦労さまです」

局員が声の方へ目を向けると、そこには電動車いすに乗った青年が微笑んでいる。黒縁眼鏡をかけた柔和そうな男だ。

「義美ちゃんかね？ これ、仁美ちゃんに手紙だてえ」

「ひいちゃんにね。渡しておくて」

義美は局員から封筒を受け取り、裏返し差出人を確認した。少々丸みを帯びた文字で『小出礼央』とあった。

「ああ、また礼央君か」

義美は弟の親友の名を呟く。

「礼央君って、ヨソに出て音楽やってる？ よく祭りん時に歌ってましたねえ」

「そうそうその礼央君ですてえ。こうやってよく弟に手紙くれるんですわ」

何度送られてきたか分からない手紙を、義美は所定のウォールポケットへ突っ込んだ。その場所には毎週のように届く弟宛の手紙が入れられる事になっている。あまりに頻繁に届く為に、手紙を受け取る機会の多い義美に合わせた位置で留められたウォールポケットが用意されたのだった。

いつもの封筒、いつもの周期で届けられたそれを、義美はいつものように受け取った。そうしてそれはいつものように、弟の仁美が読むこととなる。

その後の事など、配達し終えた局員には知る由もない。

同時刻、のどかな青空の下に広がる田んぼ。傍らには小学生が体育座りをして目の前の男の話真剣に聞いていた。男は子供らのすぐ近くで田植えの実演をしてみせる。

肘まで捲くった腕は日に焼けて褐色であり、細身でありながら薄く筋肉がついており如何にも農家の男といった感じである。だが身長は高学年の児童よりも少し高い程度で成人男性の平均を下回る。中には彼よりも背の高い児童もいた。丸みを帯びた顔と短く刈った黒髪、一重瞼で黒目がちの目元も幼さを醸し出す。

「じゃあみなさん、田んぼの中に入ってください」

男は子供たちを田んぼへ招き、指導する。子供たちが全て田んぼの中に入ると、今まで彼らがいたスペースが開けて向こう側が見えた。

「……お前」

男は体を起こし、呟く。お前、と呼ばれた男は校舎の傍からひらひらと手を振る。呟いた男は顔を背け、指導に戻ってしまった。それを見て男は小さくため息を吐き、その光景を眺める。

小学校の校舎、グラウンド、脇の田んぼの光景は昔と変わらない。

どのくらい眺めていただろうか。全く変わる気配のない風景に時間すら忘れていた。

「……礼央、いつ帰って来たんだよ」

「お帰りくらい言ってくれたっていいろ？」

男は―――礼央は呼ばれてようやく実習が終わった事に気づく。

「お帰り」

「ただいま、ひいちゃん」

ひいちゃんと呼ばれた背の低い男は、嫌そうに顔を顰めた。ひいちゃんはそう呼ばれる事を好まない。本来は『仁美』という名で、もとより女性名のように気に障るのに、礼央は好んで『ひいちゃん』と呼んでくる。幼い頃からの癖なのだから仕方ないと礼央は言うが、仁美は呼ばれる度に嫌な顔をするのだ。その為このあだ名で呼ぶのは兄である義美と、幼馴染の礼央だけである。

「なんで礼央がここにいるんだて」

今日、仁美が小学校の体験学習の講師として招かれている事は家族しか知らない。

「ひいちゃんちに行ったら義美兄ちゃんが教えてくれたんだてえ」

にやりと礼央は笑う。知っているのは家族であって、洩らすのも家族のようだ。

「今日もう暇？ 久々にひいちゃんの部屋行きたいんだけど」

「もう俺はやる事ないけども……。礼央はいいのかよ。仕事で日本に来たんだろ」

「ん。でも今日はオフだけん」

さあ行こうと礼央は仁美の手を引く。

「……荷物、職員室に置いてあるつけ。ちょい待ってろ」

するりと仁美は礼央の手から逃げて、そのまま振り向きもせずに校舎の中へと入ってしまった。しばらくすると作業服から私服へ着替え、リュックサックを背負った仁美が校舎から出て来る。Tシャツにジーンズ、サンダルと、至ってラフな格好だ。そんな自分の姿を仁美は思い出し、礼央を見て苦虫をかみつぶしたような顔になる。

同じTシャツにジーンズ、サンダルと言う組み合わせなのに、どうしてこうも違うのだろう。仁美が同じスタイルをすれば、筆筈の一番上の服を着てきました、という感じになるのに対し、礼央がそう着るとまるでスタイリストが合わせたかのように見える。実際、着ている服の質は全く違うのであるが、同じコーディネートでここまで違うと落ち込みもする。

礼央はこの田舎で際立った存在だった。

家が隣同士で、小さい頃から一緒に過ごす事の多かった仁美は常に比べられているような気分だった。子供の頃から背が低く、隣でぐんぐん背を伸ばす彼を見るのは屈辱的であったし、学校で仁美に話しかけてくる他人はいい意味でも悪い意味でも礼央が目当てだった。それでも仕方ないと思えたのはやはり子供の頃からずっと礼央と共に過ごしていたからで、幼馴染と言うポジションを仁美自身が結構気に入っているからだった。

仁美は帰ろうと歩き出す礼央を追って歩く。仁美が大股で歩き出すと礼央は歩幅を狭めて仁美と並んだ。並んでみると二人の差異が大袈裟に地面に映る。夕焼けが落とす二人の影は、同じような形をしているのにまるで長さが違う。仁美は礼央の足元から伸びる細く長い影を見ないように歩いた。

子供の頃は背後から照らす夕日など気にも留めなかったというのに、成長するにつれてひどく憎く思えた。夕刻、仁美達の自宅のある方へ歩くと、後ろから夕焼けがついてくる形になる。その為に二人の影は前に伸び、アスファルトに映る。礼央の色素の薄い髪も、肌も、目も全部黒で塗りつぶされているのに、どうして同じように塗りつぶされた自分の影と彼の影とは差異があるのだろう。そう気付いた時から仁美は影を見ないようにする事にした。見れば見知らぬ男と歩い

ている気がして、嫌だった。

見上げると、彼の右耳のピアスが増えている事を知った。いつ開けたのだろう。仁美は知らない。もしかしたら自分なんかよりも他の人の方が礼央の事を知っているのかも知れない。

何せ礼央は全世界に知られた男だ。

礼央が身にまとう香水は世界中で売れる。

礼央と同じデザインのタトゥーを入れている人は何人いるだろうか。

礼央を見る為に宝石よりも高値で取引がされる。

仁美の幼馴染である小出礼央は世界中で知られた男である。

ただし、LEOとしてではあるが。

「えー？ 今回も来てくれんの？ なして？」

「田植えで忙しいけん。何度も言ってるろ」

礼央は自らが仁美に送り付けたチケットを手に持ち、ひらひらとはためかせる。そのチケットはLEOの日本公演のチケットだ。まだ販売は始まっていないが、開始と同時に完売するような貴重なチケットを、当の本人はひらりと弄ぶ。

「一日くらい良いねっかて。もしなら、新幹線のチケットも用意するすけ」

「行かんゆうてるがよ。俺、東京なんて行ったこともねえし」

「なら俺が案内するがよ」

「良いって言ってるろ」

仁美は畳の上で体を転がせて、礼央から顔を背ける。だがしかし礼央は負けじと仁美の前に座り、チケットを押しやる。

「なして？」

ふう、と頬を膨らませる礼央に仁美はため息を吐くしかない。

これが超人気アーティストだ。

整形疑惑がつきまとう整った顔が子供のような拗ねかたで歪んでいる。そんな表情は彼のどのミュージッククリップにもCDジャケットにも使われた事がない。メディアに映される礼央の表情は決まっていて、大概人形のような澄まし顔だ。しかし仁美にとってはその表情は卒業式のような厳粛な式典でしかお目にかかる事はない。仁美の知っている礼央はよく笑うし、よく拗ねるし、よく泣く。現に今も、恨めしそうに眉を顰めてじつとりと仁美を見つめて訴えている。

なぜだと。

なして来てくれんの？ と。

方言交じりの問いに仁美は一種類の答えでしか返せない。

仁美は今までも礼央の日本公演のチケットをもらっているが、そのどれも使用した事はない。仁美は礼央のステージを一度も生で見た事がなかった。彼の手元には何枚も、未使用のプレミアチケットがある。

仁美はチケットが送られてくる度に、どんな理由で断ろうかと考える。田植えだ稲刈りだとか法事だとか何だとかと理由をつけて露骨に拒否し続けた。それでも礼央はチケットをくれるものだから、仁美は頭を抱えてしまうのが常だった。

今回なんてチケットを送るだけではならず、ご本人自らお誘いに来たものだから始末に負えない。仁美は自室の畳の上で駄々っ子のように主張するしかなかった。だが礼央も同レベルで対抗してくるのだった。

仁美がごろりと体勢を変える度、礼央も一緒に移動する。そんな子供のやり取りをしばらくの間続けていた。時計を確認する。仁美が畳に背を預けてから三十分程度経っていた。いい加減飽きてくる。だがここで了承する訳にはいかない。礼央の公演にだけは絶対に行きたくはない。

礼央の曲が嫌いな訳ではない。仁美は彼が発表するジャンルの音楽についてはよく分からないし、その殆どが英語で書かれた歌詞である為に聞いただけでは仁美には理解できない。だが聞

いていて素直にカッコイイと思うし、礼央がしつこく送り続けて来るCDは全て聞いた。ライブ映像の彼の姿を見ると見惚れてしまう。それでも、本物の『LEO』を見る事は嫌だった。

LEOは、仁美が知っている礼央ではない気がした。

テレビをつければLEOの話題で盛り上がるレポーターやタレントが映り、書店にはLEOを特集する雑誌が並んでいる。田舎にもLEOを崇拜する若者が少なからずおり、彼のファッションを真似た少年少女を時折見かける。

まるで知らない人だ。

礼央の事はよく知っている。それにLEOの事もよく知っている。同じ人物であるのに、向こう側にいる彼は別人のようだった。

それが嫌なのかも知れない。

テレビの向こう側にいる彼には触れる事が出来ない。

「……ねえ、ひいちゃん」

そろりと白い手が仁美の手に重なる。生ぬるい吐息が首筋に触れる。寄り添う礼央の体温を感じる。心臓の跳ねる音を感じる。多分、もう逃げる事は出来ない。そう仁美は感じた。

きっと逃げる事は出来る。仁美がそれを拒否すれば、礼央は素直に従うだろう。そういう男だった。それでも仁美は彼を拒絶する事はない。

仁美は礼央を拒否しない。

「……何らね」

仁美は分かっている礼央に聞く。

「ちゅーしていい？」

そろりそろりと何うように礼央の手は仁美の体を撫でる。礼央の手が仁美の手に重なると、自分とは違うそれに胸を締めつけられた。

白い手に日に焼けた手。滑らかな指にごつごつとした指。まるで違う生き物だ。

「……ええよ」

そう仁美が答えれば、礼央はゆっくりと覆いかぶさるように仁美の体を抱きしめる。

うなじに熱い息が近づく。部屋の空気との温度差を感じる。目を閉じても、人の気配を感じる。すぐ後ろには礼央がいる。彼は仁美の知っている礼央だ。こうしている時の礼央は、仁美がよく知る礼央だった。

怖々と仁美に触れる礼央は画面の向こうの白い肌をした人形ではなくて、その温もりが仁美を安心させてくれる。

「……ちゅーってするよ？」

何回も確認するのもずっと前からの癖で、変わらない癖が嬉しいと感じられる。

結局、自分の知る世界から外れていく礼央を知る事が嫌なのかもしれない。

キラキラとしたサウンドの中でLEOはゴシックな衣装を着てマイクスタンドを振りまわす。きつく引かれたブラックのアイラインと、血の気を隠すようなパウダーを叩いた頬は人形のような。母親譲りの彫深い顔立ちが余計にそう見せる。右腕上部で目を引く水仙を描いたタトゥーや、いくつもつけたピアスといった人工的な装飾が人間以上の美しさを出しているようにも見

えた。

ごろりと寝がえりを打つと、化粧をしていない礼央の顔があった。鼻の頭らへんにうっすらと存在するそばかすと縁取りのない目元は高校生の頃からあまり変わらない。

「礼央」

あんまり礼央が問いかけるものだから、仁美はじれったくなくて自分から唇を近づける。近づけるだけで、触れない距離までだ。ギリギリの距離感で見つめ合う瞬間は、仁美の緊張が最大に達する。

ああ、綺麗な緑だ。

礼央の瞳は灰色かかった緑色をしている。撮影なんかではカラーコンタクトをして真っ白だったり真っ赤だったりするが、自然な緑を浮かべる瞳が一番、礼央に似合うと仁美は思っている。

昔の礼央はその綺麗な目が嫌いだったようだ。ガイジンの血を引く礼央はよく同級生にいじめられていた。田舎ではその綺麗な目や存在感のある眼差しが目立つ。見た目が違うという理由で仲間外れにする残酷な少年達を後目に、仁美は礼央とよく遊んだ。家も近いし、何より礼央が好きだったからだ。仁美にとって少年達が礼央を除外する理由はとるに足りないものだった。見た目が違うからと言うならば、みんな見た目が違うではないか。そんな風に思っていた。仁美自身も同級生達に比べて極端に背が低く、平均的ではなかったのだ。

「ねえ、ひいちゃん」

昔もこんな風にして礼央は仁美に尋ねた。

「俺の事、好き？」

メイクの為に薄くしてある眉が悩ましげに歪む。前はもっと濃い色をした凛々しい眉だった。少しだけ、昔と違った。それでも仁美は昔と変わらぬ返事を返す。

「好きだよ」

そう言えば礼央は嬉しそうに仁美の胸に顔をうずめる。

「よかったてー。あんまりひいちゃんが俺のライブ来てくれねえっけ、嫌われたと思ってたて」

「忙しいって、言うてるねっかや」

「だけでも、一回も来てくれねえすけ……。ちょっとぼかし悲しかったがよ？」

ね？ と甘えた声が仁美の鼓膜を揺らす。

シャウトする時のかすれた声とは違う、甘く穏やかな声だ。

「……お前がくれるチケットは全部海外のじゃないの。そっげん遠いところさ、行けねえがよ」

「日本の時も来てくれなかった」

「そうだった？ ごめんね」

「……そう言われたら弱いんですけど」

ちゅ、と啄ばむキスを唇に落とされる。ゆっくりとした動作で、唇同士を馴染ませるようなキスだ。穏やかに唇を啄ばまれると仕返しに舌尖を噛みたくなる。開いた唇から舌を絡ませれば、丸いものが舌尖に感じる。驚いて引き離せば礼央はバツの悪そうな顔で笑った。

「ピアス、はずすの忘れてた」

ぺろりと、銀色の球体がついた舌を礼央は見せた。

「そっげところに穴開けて、痛くねえが？」

タトゥーどころかピアスもした事のない仁美には痛々しく見える。

「うん？ そうでもねえよ。カッコイイろ？」

「ううん……。俺にはよく分からんでも、そういうのが好きな人にはカッコイイのかも分からんね」

仁美にはその価値観が分からないが、ロックアーティストを見るとピアスを多く開けている人がいるのだからその業界ではカッコいいのかも知れない。

「ウソっこでもひいちゃんにカッコいいって言ってもらいたかったな」

「……そっげのしなくても礼央はカッコイイて」

仁美から手を伸ばす。腕を首に絡めて抱き寄せる。礼央の首元の星マークのタトゥーにキスをする。青みを帯びたそれは変な味がするのかと思ったが、礼央の汗の味しかなかった。

「ひいちゃんがそう言ってくれるのが一番嬉しいて」

甘ったるい囁きにゾワゾワと感覚が背骨を駆けあがる。LEOの歌声を聴いている時とは違う快感だ。

「そんな目で見ないでよ」

礼央はいつもそう言うが、仁美は自分がどんな顔をしているか分からない。少し気恥ずかしい。

礼央の手がそろりそろりと遠慮がちに仁美の体に触れていく。Tシャツの上を撫で、裾から入り込み脇腹を撫でてジーンズに手をかけた。

「……家の人、大丈夫かな」

「大丈夫らと思う……。父さんは集まりに行ってるし、兄ちゃんはこっち来れないから」

すり寄る礼央の下半身の熱を感じて、仁美自身は押さえることなど出来ないと感じた。久しぶりの礼央の体温に、彼を求めたくてしょうがなかった。

「ちゅー以外の事も、していい？」

礼央はキスの事を子供っぽく「ちゅー」と言う。昔からの癖の一つだ。落ち着いた顔立ちをした礼央にそう言われると何だかアンバランスで面白い。仁美は返事をする代わりに、存在感を増す礼央の熱に触れる。ジーンズ越しのその熱を直に感じたくなる。

「そのままだと汚しちゃうろ。早く脱いじゃいなよ」

「そうらね」

礼央は仁美の目の前で躊躇なくジーンズの前を寛げた。下着を濡らして張り上げるその熱がさらけ出される。

こうした関係になって何度も見たそれは、人形のようにテレビに映る彼の中で最高に生々しい部分だ。自分だけがその部分を知っているという優越感を感じる事もある。

「ひいちゃんも」

礼央は手を伸ばして仁美のジーンズの前を開く。慣れた手つきが憎たらしい。仁美のジーンズは礼央の手によって器用に脱がされた。日の当たらない部分の肌が白く浮きたち、礼央の目に入る。昼の青と夕暮れの陰りの中でやたらと白く映った。

「随分焼けたっちゃね」

礼央は仁美の太ももを撫で、そう呟く。

「このところ、外にばかり出てたけん」

「大丈夫？ 体調崩したりしない？」

「毎年やっている事だっけ、大丈夫らて。農家の男なめんなや」

「そうらろも……」

「それよりも礼央の方が心配らわ。ちゃんと休んでるのかよ」

「適当にね」

こちらにいた時よりも細くなった首を見ると、彼の言葉を信じる事が出来ない。

雑誌で、テレビで、インターネットで見ない日はない。彼はスーパースターなのだ。

凛とした真っ直ぐに切りそろえたボブスタイルの黒髪に血の気のない肌はミステリアスで、彼のゴススタイルによくマッチしている。黒く縁取られた目元は垂れ目がちでエロティックでもあった。そうした彼を人々は信奉し、『LEOスタイル』と呼んで真似する若者は少なくない。

礼央は信奉者にとって、何物にも代える事の出来ない神のような存在らしい。神は世界中で愛され、神は神として振る舞わなくてはならない。だから礼央は常に仕事をしているようなものだった。日本以上に執拗な海外のメディアの追跡の中で彼は『LEO』を演じ続けている。休まる暇もないだろう。

それでも礼央はスター性を損なわないように『LEO』を演じている。

仁美は礼央がその事について弱音を吐くところを見た事がないし、つらそうにしているところだって見た事がない。きっと、自分の前でも何かを演じているのだろうと仁美は感じている。だから、そんな気持ちも少しはあるのだろう。仁美は礼央のこうした甘えを跳ね除ける事が出来ない。

礼央の繰り返されるキスは嫌いじゃない。食べられてしまうのではないかと心配になるほどに、彼は肌を啄ばんで仁美の肌を楽しむ。執拗に撫でられる事も嫌いではない。自分よりも大きな掌で全身を触れられると、生身の礼央を感じる事が出来る。何よりも仁美は礼央に触れる事が許されている事が嬉しかった。まだ自分は礼央の傍にいる事が出来る。それがあつ種の優越感だと、仁美は理解した。マスコミもファンも知らない礼央を知っている、それが仁美にとって唯一の安心でもあつた。そしてこうして抱き合う事で、普段の距離感を解消できる気がした。

礼央は自分とは違うから。

マスメディアに映される礼央を見る度に思う。手の届く場所にいない。

彼は愛される存在なのだ。自分とは違う。

彼は才能の塊なのだ。自分とは違う。

彼はスーパースターなのだ。

こんな片田舎で農作業をして暮らす地味な男とは違うのだ。

作業の傍ら、汚れた軍手に包まれた手を見て、広大な空を見上げると自分がちっぽけな存在に思える。卑屈ではなく、素直に、なんて自分は小さいのだろうと思う。思う度に礼央を遠くに感じる。だから礼央を感じなくては辛い。『LEO』ではダメなのだ。

『LEO』は遠い。おとぎ話の登場人物なのだ。

世界中のファンが神の口づけを待ち望んでも、仁美は礼央のキスがいい。

「大丈夫だよ。ひいちゃんが見ていてくれるなら、俺は頑張れるもの」

その言葉で傍にいる事が許可される気がする。

「あんまり、頑張りすぎないでくれよ」

「分かってるっちゃよ」

礼央は仁美の顎から鎖骨にかけての首のラインに舌を這わせた。つけたままのピアスの感触が不思議と快感を生む。

思わず仁美は身をよじらせる。それを礼央は目ざとく悟って、きつく抱き寄せる。逃げる事は許されない。

「……いいって言ったろ？」

そうじゃない。逃げたくてそうしたのではない。しかし快感を口に出す事は憚られ、仁美は無言で頷いた。

「……ふふ、本当にひいちゃんは首が弱い」

そろそろと首の後ろを指先で撫でられると、それだけで押し寄せる快楽を感じる。背中に感じる畳の青臭さだけが現実味を帯びていた。キスの角度を変えると髪の毛が畳に擦れる音がする。何度も聞いた音だ。ここで何度も体を重ねたのだ。

小さな頃から傍にいて、傍にいる事が普通で、自然とキスをして、自然と体を合わせた。仁美にはそれが自然で、当然の事だと思っていた。互いに好きだと、いつだって口に出して言っていたのだから。オトナの世界を理解して、その関係が不自然なものだと知ってからは秘密の行為だった。誰も見ていないところで、二人きりで秘密の会話を交わした。それが楽しかったし嬉しかった。自分だけの礼央がそこにいる事が嬉しかった。単純に、二人で行動する事が嬉しかったのだ。今では全く違うのだけれど。

世界対自分では規模が違う。

こんなにも違うのに、一人占めしたがる自分は汚い。

確かに昔の自分は純粹に二人でいることだけが楽しかったはずなのに、今は優越感だとかなんだかオトナみたいな感情が上塗りされている子供じみた独占欲に気がついてしまう。

ただ好きと言うだけで体を重ねた高校生の自分はもういない。礼央の気持ちを繋ぎとめるセックスを優先している自分がいる。

大人になったんだ。

そう思って溢れ出そうな感情に蓋をした。

鼻から少し、息を吸ってみると、体を重ねた後の独特の匂いを感じた。仁美は気だるい体を持ち上げて窓辺に移動した。

「昔はそこから行き来してたよね」

礼央が後ろから声をかける。振り返ると礼央は畳に肘をついて寝ころんでいた。

「そうらね」

「ナツいわー。そう思わん？」

「思うて」

仁美は大きく窓を開け放つ。そこには何も無い。開けた土地の向こうに、木々が生い茂っているだけだ。人工物はない。

五年前まではそこに礼央の実家があった。礼央の両親と共に住む家があったのだ。だが今はない。

「……いい匂い。今日は何だろう」

「煮物らろ？ あと蕎麦。母さんが茹でるって言ってたっけ」

「蕎麦かー。久々ら」

ここの蕎麦を食べるとよその蕎麦は食べれんけん、と言って礼央は笑ってごろりと半回転して天井を仰ぐ。

「なあんも変わってなくて安心したてえー」

田舎特有の抑揚だ。整った顔立ちにそぐわない訛りだった。

「……変わったがよ」

「何処がらよ」

「駅前のカラオケはつぶれたし、郊外には服屋が増えた。街にしかねえようなチェーン店も出店してるし……。商店街は戦々恐々だがよ」

「唯一のカラオケが潰れたんかー。あれ以来閉店してたけどそのままらったんか」

「そうそう。修復するより、違うところに新しい店建てた方がいいって土建屋の兄ちゃんが言ってたて」

「ふうん。そう言えばひいちゃんちも少し変わったね。改築したん？」

「あのままじゃ住めんけん」

仁美はかつて自宅の玄関に張られた黄色の紙を思い出した。

あの日まで、確かに距離はなかったのに、あの日から距離は生じた。

「今年で六年目になるんだっけ？」

「そうらよ」

あの日は唐突に訪れた。

激しい揺れが大地を揺さぶったあの日。

何もかもが壊れたような気がした。

大地震。

マグニチュード七、震度六の直下型大地震は山と田んぼばかりの町を襲い多くのものを壊し

ていった。電気も水もない生活など、生まれてから一度も送った事がない。

一度目の揺れの時、仁美と礼央はこの部屋にいた。魚沼家の母屋の一階の隅っこにある仁美の自室で、二人は音楽を聴きながら喋っていた。明日の日曜日には電車に乗ってN市に行こう。N市にはこっちにはないショップがたくさんある。バイト代が入ったから遊びに行こう。そんな話をしてきた時だった。

大きく体を揺さぶられ、驚いた。積まれていた週刊少年誌が足元に崩れる。本棚が倒れた。頭上の蛍光灯が激しく揺れる。仁美はかつて出した事のない大声で叫んでいた。怖かった。このまま止まらないのではないかと思えた。

死ぬかも知れない恐怖。

次に湧いたのは自分ではない誰かが死んでしまうかも知れない恐怖。

気付けば揺れは止んでいて、仁美は礼央の腕の中にいた。とっさにかばってくれたらしい。礼央の顔は硬直していた。これはただ事ではない。被害状況はどうだろう。部屋のテレビは引っくり返って使えそうもない。行こう、と仁美が声をかける。一言が精一杯だった。礼央は頷き、二人で部屋を出る。廊下はかろうじて無事だったが、天井の埃が振り落とされたのか床は真っ白だった。礼央が強く手を握り締める。白い廊下を歩くと、二人の足跡が残った。外に出るまで無言だった。

辺りを見渡す。どうやら近くの山では山崩れは起きていないようだった。しかし一点に目をやった時、頭が真っ白になった。

礼央の家がない。

否、家であったものはそこにあった。

礼央の家はこの辺では平均的な、昭和の名残を残した木造住宅だった。

瓦礫の山がそこにはあった。

音は全く聞こえなかった。

礼央が瓦礫の山に向かって駆けだす姿が見えた。まるで何も聞こえない。どうすればいいのか。仁美は自分の家を見た。母屋は無事のように。母や父は外出中だ。兄は大丈夫か。仁美は考えることなく家の中に戻った。まだ無事だ。兄は離れの部屋にいるはずだ。

仁美が生まれる前は亡くなった祖父母らが寝起きをしていた庵のような古い部屋なのだが、もの好きな兄が自室として使っていたのだった。仁美は母屋から離れへ続く渡り廊下を走る。何かの破片を踏んだが気にならない。

腕を掴まれる。無理やり制止され仰ぐと兄の義美がいた。何かを言っているが聞こえない。二度目の揺れが起こる。大きな揺れだった。渡り廊下が崩れる。床から、柱、屋根と順番に沈んでいった。ここで記憶は途絶えた。

次の記憶の始まりは病室で、市内の病院にいた。父と母が心配そうに覗き込んでおり、しかし義美はいなかった。義美はどうしたのかと問えば、言葉を濁される。嫌な予感しかしない。きつく問えば、今の市内の設備では処置出来ないから、市外の病院に転送されたのだと言った。送電の止まった状況では緊急用の自家発電装置で賄っている状態で、重傷患者や入院中の患者は市外の病院へ搬送されている最中なのだと言う。兄の義美もまた、応急処置を施したのちに市外の病

院へと転送されたのだ。意識はあるの、と母は言う。仁美を心配していたとも言った。

その時は、生きている、よかったと思えた。

幸い打撲程度の怪我で済んだ仁美はすぐに病院を追いだされた。よかった。いつまでも病室にいる訳にはいかない。仁美は礼央を探したかった。あの後礼央がどうなったのかは両親も知らなかった。一度自宅に戻り、恐る恐る部屋をあさる。本とCDで畳は埋もれていた。CDを踏まないように歩く。貴重品と、壁に飾っていた写真の内一枚だけを通学用に使っていたリュックサックに詰めた。

家を出る前に、渡り廊下に向かった。ぐしゃぐしゃだった。渡り廊下全体が崩れ落ちており、建物の形を成していない。ぞっとした。兄は無事なのだろうか。両親は殆ど教えてくれなかった。

両親が避難している近所の市民体育館に行けば、体育館の床が見えない程に毛布が敷き詰められていた。ホールにある大型テレビでは被害情報を報道するニュース番組が流されていた。隣町が震源地であり、隣接する仁美達が住む町も甚大な被害が見られている事を知った。でこぼこになった道路と倒壊した家屋が映しだされ、仁美はその被害を知った。学校は大丈夫なのか。父親が管理している田んぼは大丈夫なのか。いろんな事が頭に浮かぶ。いてもたってもいられずに、仁美は埃まみれの自転車で駆けた。

ニュースで見たような隆起したアスファルトに、崩れたブロック塀、倒壊家屋は思ったよりも少なかったがぼつぼつと見られた。

当時通っていた高校に行くと、数人の生徒と教師がたむろしていた。高校の体育館は避難所に指定されていたものの、揺れに耐えきれずに落ちた照明のせいで使用不可能のようだ。部活動で来ていた生徒は電車を使う事が出来ずに帰宅出来ないらしい。

次に田んぼに向かう。稲刈りを終えたばかりの田んぼは見る限りでは無事だった。倉庫に保管してある乾燥前の稲はどうかと思ったが、そちらは大人が管理している為に仁美には確認する事が出来ない。

自分の目で被害状況を目の当たりにした時、これまで田舎だ自然だと思っていた町が如何に人工的で作られた街だったという事実を知った。夕暮れ時に光が見られない。

自転車を置きに自宅へ戻ると、玄関に黄色の紙が貼られていた。それは一部倒壊家屋に貼られるものだった。隣家を見る。礼央の自宅だ。礼央の自宅にはかろうじて残っていたブロック塀に赤い紙が貼られていた。危険を示すその赤の意味は、近づいて内容を確認せずとも何となく理解した。

これからどうなるのだろう。高校生だった仁美には想像できなかった。それでも時間は過ぎていき、避難所での生活を終える人々が増え、学校が再開し、少しずついつもの生活が取り戻されていった。

だがしかし仁美の生活の中で義美と礼央の存在が欠けていて、不自然な感じがした。

義美は市外の病院に入院していた。両親に容体を尋ねても言葉を濁された。仁美にはスキージャンプの強化選手である彼が気がかりだった。

礼央は再開した学校にも姿を見せなかった。災害当初の回線の混乱で使用不可となっていた携帯電話での通話も正常化したというのに、何度彼に電話しても出てはくれなかった。そんな事、

一度もなかったのに。電話をかければ三コール以内に出てくれたのに。

電車の運行も再開し、段々と歯抜けだった教室の机も生徒で埋まっていった。そんな中で礼央の机だけは埋まらなかった。どうしたのと、幼馴染である事を知っているクラスメイトが聞いてくるが仁美にも分からなかったから答えられなかった。

不安の中で理解した事実は残酷だった。

危険性があると判断され、自宅に帰る事が出来ない生活が続いたある日、携帯電話にメールが届いた。礼央からだった。呼び出されて小学校の校庭へ向かうと、そこには高校の体操着を着た礼央が立っていた。

「……礼央！」

校庭のコンクリート製の国旗掲揚台に寄りかかるようにして礼央は立っており、声をかければすぐに振り返った。

「ひいちゃん、来てくれたんらね」

「来るよ。なしたの？ ずっと連絡くれないで。俺も、みんなも心配してるがよ」

「ごめんね。どうしようかなーって、ずっと考えてて」

「……なしたの？」

あまり寝ていないのか、礼央の目元にはうっすらと隈がある。

「……俺、ひいちゃんと離れて暮らさないといけなくなったがよ」

礼央は言った。絞り出すように、しかし努めて明るく言った。

「な……なして？」

聞きたくなかった。仁美はしっかりとその原因を見ている。しかしそれを認めたくなかった。

「……家も壊れちゃったし、父さんも、母さんも死んじゃったからね。俺一人じゃダメだって。向こうの親戚に引き取られる事になったんだ。こっちだと、ここらの人だけん、大変だって」

「向こうって……どういう事だよ」

「アメリカ。母さんの末の弟さんが家に空きがあるからどうかって」

「……いつ行くんだよ」

「もうちょっとこっちの交通が落ち着いてからかな。電車も安定してないし……」

そう、知っていた。連日のニュースで報道される被害者の名前の中に礼央の両親の名前があった事も、礼央の自宅が住める状況にない事も。しかし、そこから推測される礼央の今後を考える事は拒否していた。

「……行くのかよ」

「うん。行くよ」

仁美は礼央のジャージの裾を握ろうと思って、止めた。引き留めるような仕種に思えたのだ。引き留めたって、どうにもならない。礼央が行くと言っているのだ。

「……あ、義美ちゃん、どう？ テレビで見たんだけど……」

義美は世界大会でも好成績を上げている有名な選手だ。そんな選手が地元の大地震で負傷したとなれば大きく報道される。これも、知る事を拒否していた事実だ。一回りも離れている兄の実績は仁美にとって喜ばしい事だった。それだけに、認めたくなかった。

「……兄ちゃんは……もう、ジャンプできないって」

しまった、という礼央の顔を見ると、ひどく申し訳ない気分になる。

「ごめん……。悪い事聞いた」

「いいて。テレビでも言う事ら」

「けども……」

礼央は仁美の双肩を掴み、声色を低めて囁く。

「……お前の顔、大丈夫って顔じゃねえもん」

頬を伝う涙に気付いた。

とめどなく涙は幾筋も頬を伝い、地面に小さな小さなシミを作っていく。ぼろぼろとおちているのに、大地はすぐにその涙を吸収してしまう。

ダメだ。泣いてはいけない。礼央の方が辛いはずだ。自分には帰る家がある。迎えてくれる両親がいる。けどもう礼央は帰れない。ここで自分が泣いてはいけない。泣けば礼央は慰めてくれる。それではダメなのだ。

こんな時、どういう表情を作ればいいのかだろう。

泣きたい気分だ。けど親友を前にすると泣く事は許されないような気がした。

分からない。

泣きたくない。

微笑んで、親友を慰める事も出来ない。

顔の筋肉が涙に濡らされて冷たくなっていくようだった。冷えて、固まって、動かせない。けれど今だけは親友を心配させないように、微笑みたい。

「礼央、俺は大丈夫らよ」

仁美は礼央を見上げ、微笑んだ。口角を上げて、あまり好きではない両方の八重歯が見えるように微笑む。

「それよりも、今どこにいるんだっや。学校にも来ねえでせ。みんな心配してるんだから」

「……今は父さんの方の親戚んちに避難してるんだ。ちょっとずつ家の方片付けて、必要なもの以外は処分しちやおうかと思ってるんだよね。もうちょっと落ち着いたら、簡単だけど葬式もするし……。あ、でも、俺はよく分かんないから、もしかしたら合同であげるかも。全然しくみとかわかんねえし……。その方が父さん達の知り合いも来やすいかなって思うし」

「あんま無理せんでね？ ほら、今避難所の方だとエコノミー症候群とか流行ってるんさ」

「気をつけてるがよ。こっちの親戚、学校の先生でね、そういうのちゃんとしてくれるが。だっけん、大丈夫らよ」

礼央が微笑み返し、仁美は安心する。

心配させてはいけない。礼央の方がこれからもっともっと大変なんだ。

自分は打撲をしたただけだ。

周りをもっと大変だ。

義美も礼央も、これまでの生活を切り捨てなくてはならない。

この突然の大災害は多くの命を奪い、多くの建物を崩し、多くの生活をめちゃくちゃにした。自分だけが辛いだなんて思ってはいけない。それぞれがこれまでとは違う生活を余儀なくされて

いる。自分だけが不幸だなんて思ってはいけない。辛いと感じても、苦しくても、悲しくても、自分だけではないから、我慢して、見せてはいけない。

辛いだなんて、どの口が言えるのだ。

そう思ったら、自然と涙は止まっていた。

泣いてなどいられない。

「ひいちゃん」

「何らね」

「……今まで電話とか出れんくてごめんね」

「気にせんよ。仕方ねえもん」

「お詫びにね、何でもひいちゃんの言う事聞くよ」

礼央は柔らかな笑みを浮かべて、目を細めた。

「何でも？」

仁美は問い返した。

「そう、何でもらよ。何がいい？」

礼央は電話なんかに出れる状況になかったのだ。それでも礼央はお詫びをしたいと言った。

「なんもないっちゃよ」

「何でもいいがあよ」

「ないがよ」

「……ひいちゃんの電話に出れんかったのが俺には嫌だったんさ。気がすまんの。だっけん、何でもいいが。言う事聞かせて？」

王子様のような事を言いやがる。

仁美は心の中で毒づいた。

それでも礼央には似合いのセリフだと思った。涼やかな目元も彫深い顔立ちも長い手足も王子の振る舞いにはぴったりだ。本当に何でも叶えてくれそうに思える。

唇がわなないた。

絵本の中の王子様なら、確かに何でも願いを叶えてくれるだろう。だが礼央はただの人だ。仁美自身がよく知っている事だ。それに、仁美が思いついた願いは礼央には叶える事が出来ない。言うだけ無駄で、礼央を困らせる。仁美は発音しかけた唇を閉ざした。

「……何でもいいがよ？ 俺はひいちゃんの為に何でもするよ」

「じゃあさ、こうしよ」

今は思いつかない。だから、思いついた時に聞いてほしい。

そう仁美が告げると、礼央は満面の笑みを浮かべて了承した。

「そりゃええね。約束するよ」

そう返した礼央は翌月親戚のいるアメリカへと渡ってしまった。いまだに仁美は礼央に願い事を伝えてはいない。

あの日からもうすぐ六年の月日が経とうとしていた。米農家である仁美の家でも大きなダメージを受けたものの補助金や親戚の力を借りてようやく体勢を立て直したところだ。家屋の無事だった部分は耐震改築をし、怪我の後遺症の為に歩く事の出来ぬ義美の為に増改築が施された。あまりの変わりように、久しぶりに訪れた礼央にとっては全く違う家に思えた程だろう。

復興している街も段々と変わっていく。液状化現象で沈下した道路は舗装されて何処までもなだらかだ。崖崩れで使用不可能となった道路も迂回路が作られ、仮設住宅は姿を消し、新築の住宅が立ち並び街並みも様変わりした。地震は古ぼけた街並みをもものすごい速さで変化させてしまった。

六年経って、アメリカでも音楽を続けていた礼央は大成功を収めたし、仁美は農家を継ぐつもりで家の事に携わっている。街並みと一緒に、二人もそれぞれ変わっていった。

大人になったのだと仁美は思う。

同級生では結婚した者もいるし、子供がいる者も少なくない。時折集まる中学校の同級の話題は学校の話から仕事の話へと移行した。都会の大学へ進学した友人は就職難だと嘆き、既に働いている友人らは不景気だ仕事がないと嘆く事が多くなった。

変わらない訳がない。ふくよかだった友人がすっかりこけた頬で笑ったのを思い出す。

一秒の積み重ねは六年の厚みをもってその変化を見せつけた。

仁美には礼央が渡米してからの時間の経過が速く思える。歌っていたライブハウスで声をかけられたとメールが来てからは、彼からの報告がなくとも彼の様子が伺えるようになるまでそう時間はかからなかった。毎週届く手紙の消印が毎回違うものになってしばらく経つ。だが多忙の合間を縫って投函する手紙の中味は常に同じで、仁美の身边を気遣うものだ。

礼央とはこれまでも会っていたが、会うたびに姿が変わり、会う時間が短くなり、会うスパンは長くなり、テレビの画面での方が彼の姿を見る時間が多くなった。

子供の頃から音楽が好きだった礼央が、音楽で成功した事は喜ばしい事だ。その為の変化を、友人として受け入れたいと思う。だが仁美には『LEO』は遠くの存在でしかなかった。『LEO』を礼央として認識してしまうと、礼央までも遠くの存在に思えて来る。

彼と体を重ねる事で、その帳尻を合わせようとしているのだと仁美は感じる。

遠くに感じる彼を、昔のままに受け入れるにはそうするしかなかった。

容貌や立場が違って、体温だけは変わらない気がした。だから仁美は礼央と会うたびにセックスをした。確かに彼を愛してはいる。親友として、そしてそれ以上の感情で彼を思っていると自分でも判断している。そうでなければこんな恥ずかしい事は出来ない。

そんな思いを向い合せに食事をする彼に悟られないように、仁美は目を反らしテレビに視線を向けた。バラエティ番組の合間に流れるCMは見ないようにする。どうしても『LEO』の日本公演のCMが映ってしまうからだ。テレビの向こうの羽のようなつけ睫毛を目元に飾る彼と蕎麦をすする彼を重ね合わせると、同じ食卓を囲んでいるのに途方もない距離を感じる。

「ごちそうさまでした！ やっぱりこっちの蕎麦が一番うんまいですて」

礼央の笑みに義美は応える。

「もっと高いお蕎麦も食べられるでしょ？　こんなこのらのスーパーならどこでも買えるねっか」

「やっぱり小さい頃から食べてますから。他にも有名な蕎麦もあるけども、ここのそばが一番ですて」

「そっか。そう言ってくれると嬉しいねえ。ねえひいちゃん」

兄は黙って聞いていた弟に話しかける。それは温厚な彼の気遣いなのだろう。だが仁美はテレビでタレントが如何にL E Oのファッションが若者に影響を与えているかを語っている様子に気をとられていた。現在世界中で彼のように、ダークグレーとシルバーのアイシャドーで目元を囲み、大袈裟なほどに垂れ目がちにブラックのアイラインを引くメイクが流行っているらしい。そうしたメイクをした女性タレントとL E Oを比較する画像が映されている。

「礼央君らねっか。すごいねー。このタレントさん、今すごい人気あるんらよ。そんなタレントさんも真似してるんらね」

「俺のはメイクさんが考えてくれますから。メイクさんのセンスがすごいんですよ」

「……それでもお前の音楽にあってるから人気出たんだと思う」

何気なく仁美が漏らした言葉に礼央は大袈裟に反応した。

「ひいちゃんがそっげんこと言ってくれると嬉しいて……！　いっつも全然褒めてくれねえっけさー」

それを聞いて義美は柔らかな表情を顰める。

「そうなん？　ひいちゃん、いっつも礼央君の音楽聞いて褒めてるねっか。礼央君には言っていないの？」

「兄ちゃんは黙ってれて……！」

不意に秘密を明かされ仁美は思わずひるむ。その隙に義美はたたみかけた。会話を弾ませようという彼に悪気は一切ない。

「この子、今までのチケット全部ファイルに保存してるんよ」

「兄ちゃん！」

朗らかな兄を怒鳴る事はあまり好きではない。しかし二の句が告げぬように大声で遮る。

「もういいねっかて」

「なんらね。内緒にしてたんか？」

きよとん、と義美は目を丸くさせる。本当に彼には悪気が微塵もないのだ。

「……だって」

今更褒めるなど、気恥ずかしい。不躰で遠慮がないくらいがちょうどいい関係だったのだ。

礼央の視線を感じる。仁美は食べ終えた器を持って立ち上がる。

「もう、行くわ」

「え、なして？」

「食べ終わったけん。兄ちゃん、食器は置いておいていいから」

きい、とフローリングをゴムタイヤが擦る音がした。義美は車いすを繰り、進行方向を出ていこうとする仁美に向ける。

その音に仁美は留まりかけ、だがそのまま目もくれずにキッチンに向かった。

その音は歩けない義美を仁美に認識させる。

仁美はため息を吐いた。洗い桶に器を浸す。

この六年は多くの変化をもたらしたと、仁美は自身で認めている。自分自身も、礼央も、他の友人らも家族も変わった。そして義美も変わった。

まず目線が低い。昔は少しだけ兄の方が背が高かった。今では仁美の肩よりも下から彼の声が聞こえる。それに足が細くなった。毎日のランニングで鍛えた足は西洋の彫刻のような美しさを備えていたのに、今は木の枝のように頼りない。それからシャープな顎のラインは穏やかに丸みを帯びた。多くの変化は仁美に現実を見せる。義美は歩く事が出来ない。だから常に車いすで移動し、足の筋力が落ち、少し太った。柔らかな兄の足を見ると、彼がスキージャンプの選手として有望されていた頃を思い出す。今ではすっかり過去の人だ。

兄もまた、あの日から生活を一変させた。しかし義美は笑顔のまま、歩けぬと嘆いた事はなかった。お前のせいだと憎む事もしない。義美の口からは恨みごとなど出てきた試しがない。それでもきいきいという音を聞くと、歩けないという事実だけが浮かび上がる。

変わったと思っているのは錯覚かも知れない。本当は変わらぬ事を望んで、あの日の事実をなかった事にしてしまいたいと、思っている。そんな風に自分を分析してしまう。

あの日からの積み重ねの毎日は、ゆっくりと仁美の思考を鈍らせていくようだった。それだけに縛られて、あの日がなければと考えてしまう。もしも、など進んでいく時間の中では浅はかな考えの一つで、仁美は見ないふり気付かないふりをして振り切ろうと試みる。

だから仁美は画面の向こうの彼を見る事をしないし、車いすの音が嫌いだ。

見たくない聞きたくない知りたくない。あの日から目に映る事実は仁美の呼吸を妨げる。思い出すと六年間の記憶が目まぐるしく頭の中を駆け巡り、息が苦しくなる。それを誰にも悟られないように、仁美は一人で深呼吸をする。

眩暈がする。

立っている事が出来ずに床にしゃがみこむ。隣の部屋からはバラエティ番組の笑い声が聞こえた。目を閉じて、その音に集中させる。

昔から変わらぬ人の笑い声。変わらないものもあるじゃないか。あの日は全てを破壊したのではない。理解しているはずなのに、心臓はうるさく鳴り響いて思考を阻害する。

あの日がなければ。

自分はどんな生活をしていたのだろう。彼らはどんな人生を歩んでいたのだろう。

空想の今と現実の今が混ざりだし、混乱する。

苦しいと言わないように口を閉ざし、涙がこぼれないように目を閉じる。そうして鼻から息を思い切り吸い込んで、ただ口から息を吐く。情けない言葉を言わないように細心の注意を払いながら。冷たくなった手は指先からしびれていく。微かに震えている。ダメだと、双方の手を牽制するように拳に握る。

あとどれくらいこうしていたら、こんな無益な空想を断ち切る事が出来るのだろう。

何を見てもあの日以前の事を思い出す。壊れる前の時間を思い出す。思い出すと顔が強張る。唇が戦慄く。そして唇を噛みしめる。泣かないように息を飲んで、前を見据えて、緊張して、そう

したら自然と冷静になれた。そして自然と笑わなくなっていた。

つまらない訳じゃない。バラエティ番組は面白いし、父親の冗談はたまに面白い。地元に住む同級生と飲む時は楽しいし、礼央がテレビに映るとなんだかんだで嬉しい。

感情がない訳じゃない。

悲しい。

嬉しい。

怒り。

喜び。

つらい。

楽しい。

胸を押し上げる感情はいくらでもある。言葉で表せない程の感情はいくつでもある。数え切れない思いはいくらでも湧き上がる。それでも表情は追従しない。感情と表情がリンクしない。感情が表情へ影響する過程の中で、どこかが途中で途切れていてどこかで消えている。どこへ消えてしまっているのか見当がつかない。

地震の前の写真を見ると確かに自分は笑っている。目を細めて、口角を上げて笑っている。

あの頃の自分は笑えていた。今は同じ場所にいても笑う事が出来ない。そう思うとやけに息が苦しくて、心臓が早鐘を打つ。

仕方ないじゃないか。笑えないのだから。

本当は笑いたい時に笑いたい。動かぬ顔に触れても、一向に柔らかくはならない。

笑えなくなった時から礼央は幾度となく「もう大丈夫」と言っていたが、今はもうこれまで通りに接するようになった。笑えないと言うことだけは変わらずに、それでも彼は普段と変わらなかった。それが嬉しくて、笑えるようになりたいのに笑えない。

生きる事に必要なものではない。だけれど欠けているそれは常に日常の中に穴を作り続けて、穴には何もなくて、中途半端だった。

冷たい人だと、つまらない人だと他人に言われる事は構わない。ただ一人礼央の前では笑いたいと思っている。礼央に比べて特筆すべき部分の見当たらない自分でも、せめて他の人間のように礼央に笑いかけたかった。

笑えない自分に礼央は笑いかけてくれる。

心苦しい。

礼央の笑みを待ちわびるファンは世界中にいるのに、礼央は画面の中で笑う事がない。天使のような澄まし顔で歌っている。礼央にとって周りの喧噪など関係ないのだ。彼は歌いたくて歌っているのだ。昔から変わらない。

歌い続ける彼を見ていると、昔に戻りたくなる。

以前のように笑えたなら、少しは彼に応える事が出来るのではないかと思う。

そう考えても、笑う事は出来ないのだけだ。

時折母親が言う。もう笑っていいのよ。もう何年も前の事だ。何もかも元通りじゃない。義美はスキーではない事で頑張っているし、礼央君も歌で頑張ってるじゃないの。うちも綺麗に直し

たし。しばらく大きな地震が来る事はないでしょ。

もう、笑っていいのよ。

あんたが怖いものはないじゃない。

本当に昔から怖がりなんだから。

もう子供じゃないのよ。

だから、笑いなさいよ。

そんなつまらない顔しているとお嫁さんが来ないじゃない。

変なところで神経質なんだから。

よく笑う子だったのに。

そして最後に母はため息を吐く。

変わったわね、と言って深いため息を吐くのだ。

笑いたくない訳じゃないんだ。本当は、笑いたい。

それでも表情に変化はない。

朝、洗面台を見るとあの日の光景を思い出す。あの日、洗面台は倒れて背面の化粧板を見せていた。鏡を見ると嫌でも強張った頬を見る事になる。

改築された平らな廊下を見ると思い出す。あの日から義美は車いすで移動しなくてはならない。あちらこちらに兄の為につけられた手すりが目につく。

外に出れば開けた土地がある。そこには礼央が住んでいた。

大きな音が怖い。

怒鳴り声が怖い。

ざわめきが怖い。

怖い。

震える肩を押さえつけると、双肩に温もりを感じた。

「ひいちゃん」

見上げると見慣れた瞳があった。

「大丈夫？」

礼央は仁美と同じようにしゃがみこみ、目線を合わせる。覗き込む眼差しは柔らかい。テレビとは違う温度の眼差しに仁美は見入る。

「ひいちゃんがそっげん風になってるのはツライけん、もうやめて」

「……俺は怖いんだ」

怖い。

全ての事象が怖い。

何故怖いのだろう。

「何が怖いのか？」

蓋をした思いに礼央は手をかけた。ゆっくりと開かれる。閉ざしていたものが溢れる。

頬が冷たい。溢れる熱い感情がとめどなく頬を濡らす。

「まだ俺は地震が怖い」

震える指先を礼央が握り締めた。震えはゆっくりと納まる。

「またあんな事があつたら、どうしようって、俺は怖い」

「もうしばらく大丈夫だよ」

「そんな事、分かるもんか。この間の地震だって、ずっと来る来るって言って結局来なくて、忘れた頃に来たんじゃないか」

「耐震工事だってしてるねっか。高校だって改築してたろ」

そうじゃない。そう言う問題ではない。仁美は子供のように首を振り、否定を示した。

「……それでも怖いよ。俺はもう、あんな思いはしたくない」

当たり前が当たり前でない事に気づく事が怖い。

そこにあった暮らしが簡単に崩れる瞬間を見た恐怖が焼きついて離れない。

あの日言いたかった我儘が頭をよぎる。

傍にいて

離れないで。

怖いから。

失うのは怖い。

これまでが嘘のようになくなるのは怖い。

それでも何事もなかったように送る生活が怖い。

一番怖いのは、礼央が傍にいない事だ。

「もう嫌ら……あんなの。なんもかんももんじゃくって、ぶっ壊して……。田んぼはめちゃくちゃだったし、米蔵もしっちゃかめっちゃからし、兄ちゃんはスキー出来んし、歩けねエし、お前はアメリカなんて行っちゃうし、帰ってこれねえし。もうそっげんの嫌らわ……！」

怖い事がたくさんあった。自分だけが辛いのではないと全部に蓋をして、閉じ込めて、そうし

て感情も一緒に閉じ込めた。

箱は開かれた。

嗚咽が言葉を遮る。

礼央の大きな体が仁美を包み込んだ。仁美は驚き尻もちをついた。そのまま礼央は彼を覆いかぶせるように抱きしめる。

「ひいちゃんは本当に何も言うてくれんけん、ばあか心配になるて……」

人形のような彼の体温はひどく温かだ。

「ねえ、俺が何で歌うか分かる？」

突然の礼央の問いに答えが見つからない。

「分かんねえよ」

「嫌らわ。今更だて」

礼央は歌うように囁いた。

「ひいちゃんに、俺がいるって事を伝える為らよ」

礼央の真っ直ぐな言葉に吹かれて、記憶が渦のように舞い上がる。共に仕舞いこんでいた思い出が次々と映されては胸を擦った。

そう言えば、彼はいつも歌っていた。いつも彼の歌声に気がついて、彼を見つける事が出来た。何処にいても、彼を見つけ出せた。

放課後の音楽室で、夏祭りの喧噪の中で、文化祭のステージで、いつも彼を見つける事が出来た。彼の歌声はいつだって最優先で認識してしまう。

「ねえ俺を見てよ」

澄んだ視線から目をそらす。だが礼央は仁美の頬を両手で挟み、無理やり前方を向かせた。

「……俺はひいちゃんが見てくれなきゃ、歌う意味がないんらよ」

「そっげん事……何で言うんらて」

「だって俺が歌うとひいちゃんは俺を見つけてくれるし、笑ってくれる。それが俺には嬉しかったから歌う事が出来るんらよ。……もう随分笑ってくれないけど」

悲しげな声色に胸が痛む。

笑いたい。この男の前で笑いたい。それでも頬は頑なで、意固地だ。

「でもね、無理をしないで。俺はいつでも分かるように歌うから。ひいちゃんがいつでも俺を呼んでくれるように、分かるように歌うから。急がないでいいんらよ」

礼央の声は胸に染み渡る。

かつて聞いた歌声が思い浮かばれる。

力強い声が、優しい声がいつだって耳に残っていた。

「何もかんも変わってしまったかも知れねえけども、俺は変わんねえよ。ひいちゃんの為に歌ってたいがよ」

ロックスターはそう言った。

否、礼央はそう言った。彼はいつでも仁美の前では変わらずに礼央なのだ。

「……前にも言ったろ？ 俺はひいちゃんに何でもするって」

鮮やかによみがえる別れの場面。あの日も彼は優しかった。

「ほんっとうにおめえは……」

あの日失くした思いは溢れた。

「そっげんことの為に何やってんらて……ッ！ あっげん派手んカッコして、歌って、人気あるのに、バカみたいな事言って……」

「バカでいいっちゃー。ひいちゃんが俺を見してくれるんなら」

ぼろりぼろりと堰きとめていた涙が零れおちる。乾いていた頬を濡らして、触れる礼央の手を濡らしていった。

「俺は何があっても、ひいちゃんの傍にいるからね」

こんなにも近くで歌っていた彼を、すっかり見失っていた。

初めて光の中で歌う彼の姿を見た。LEOは白いドレスを身にまとい、白い羽を頭に飾り、歌い叫んでいる。LEOは熱狂的なファンに囲まれて堂々と振る舞っていた。ファンは彼の姿を見て歓喜の声を上げる。大きなライブ会場は熱気で包まれていた。

LEOは日本語で綴られた新曲を披露している。初めて披露されたその曲に観客は酔いしれる。そして仁美は頬を染めた。

ストレートなラブソングはLEOのステージ衣装を婚礼服に見せた。

歌の中で彼は永遠の愛を誓った。恐ろしいほどに情熱的な誓いを、観客は歓声で応える。もっと、その歌を聞かせてほしいと、彼らは請う。LEOの叫びは観客を振寄せた。

仁美はそんな光景に呆気にとられながらも、ステージ上の礼央を見た。飾り立てられたステージの中で礼央は際立って美しい。

礼央がこちらを見て、微笑んだ。同じブロックにいる観客は自分に微笑んだものだと騒ぎだてる。ワッと身を震わせる嬌声上がる。それでも仁美は礼央を見つめた。どうして彼は自分がいると分かったのだろう。行くだなんて一言も言わなかったのに。

礼央には自分の姿が分かるのだろうか。

この多くの人の中で、ただ一人自分を見つけ出してくれたのだろうか。

そう思うと、じわりと温もりが湧き上がる。

後で聞こうと思った。

きっと彼は「勿論らよ」と言うはずだ。そんな彼を昔みたいに小突く事が出来れば嬉しい。

仁美はそっと手の中に隠した写真に目をやった。地震の時に唯一持ちだした写真だ。写真の中で仁美は礼央の隣で笑っていた。中学の卒業式に撮った写真だ。卒業証書を入れた筒を手に、肩を組んで笑いあっていた。その笑みに今の礼央が重なって見えた。

頬が緩むのを感じる。

頬に触れていくメロディが心地よい。

歌い踊る彼は手で拳銃を形作る。

LEOは激しくシャウトした。

歌声は心臓を射ぬいて、一人の男は殺された。

残された男はただ微笑んで、拳銃の持ち主に手を振って見せたのだった。

〈終〉

IN THE BOX

<http://p.booklog.jp/book/90734>

著者 : mafuya79 (@mafuya79a)

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mafuya79/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90734>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90734>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ